九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

C・コランジェロ『ジャン・スタロバンスキー』

原田, 裕里

https://doi.org/10.15017/8797

出版情報：Stella. 23, pp.157-161, 2004-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

C・コランジェロ『ジャン・スタロバンスキー』

原　田　裕　里

ジャン・スタロバンスキーについてはいまさら贅言を要すまい。長らくジュネーヴ大学においてマルセル・レイモンやジャン・ルッセの同僚として教鞭をとるかたわら，旺盛な執筆活動によって批評家としての不動の名声を築いたジュネーヴ学派の泰斗である。1957年に博士論文『J-J・ルソー――透明と障害――』(以下『透明と障害』と略記）を世に問うて以来，彼の知的踏破はルソー研究にとどまらず，文学・思想・医学・精神分析といった幅広い分野におよんでおり，そうした思考の遍歴は『批評の関係』(1970年)，『モンテーニュは動く』(1982年)，『病のうちなる治療薬――啓蒙の時代の人為に対する批判と正当化――』(1989年）などにみごとに結実している。もちろん彼の業績は著作だけにとどまらない。長年ルソー協会を運営し，数々の国際会議を主催するなど，積極的に学界を先導してきた功績もまた計り知れない。このように多岐にわたって精力的に活躍してきたスタロバンスキーは現在にいたるもなおいささかも衰えをみせず，2004年10月にはジュネ―ヴ大学において「癒すとは何か」というテーマで公開授業をおこない，また11月には詩人イヴ・ボンヌフォワとの共著による『ゴヤ，ボードレールと詩』を上梓している[1)]。かような碩学の多大なる業績が，1998年にアカデミー・フランセ―ズのフランス語圏大賞という栄誉に浴したのはごくとうぜんのことと首肯できよう。また今年『批評』誌(2004年8－9月号）が彼の特集号を組んだことも，後進のうけた学恩がいかに大きいかを物語っている（ちなみに彼自身も同号に「トロイの記憶」と題するエッセーを寄せている)[2)]。

かつてスタロバンスキー自ら「それが人間の条件を知る最良の方法だった」と証言したように[3)]，彼の文学批評は，文学と医学の両側面から緻密な分析をおこなう独自の方法に拠っている。そのような複眼的な〈視線〉，すなわち批評の眼を分析したのが，本書『スタロバンスキー――その視線を学ぶ――』であ

る[4)]。著者カルメロ・コランジェロはナポリ大学，ついでジュネーヴ大学において哲学と文学を専攻し，スタロバンスキーのもとで厳格なテクスト分析と学問的アプローチを学んだ彼の愛弟子である。すでに彼はミュリエル・ガニュバン等による論文集『スタロバンスキーは動く』(2001 年) にスタロバンスキーの初期作品をあつかった論考を寄せているが[5)]，2004 年に満を持して上梓した本書こそ，ナポリ大学およびジュネーヴ大学に提出した 2 つの博士論文をさらに充実させた本格的な研究書であり，批評家スタロバンスキーにかんする初のモノグラフィーとなる。

では，さっそく本書の内容を紹介しよう。まずコランジェロは，第 1 章「事件に立ち向かう」においてスタロバンスキーの経歴にふれながら，学問的な背景について論じている。それによると，ユダヤ出身の両親のもとでジュネーヴに生まれた批評家にとって，第 2 次大戦中のファシズムによる弾圧を経験したことが学問を志す大きな契機となった（戦時下のドイツを離れ，多くの知識人がスイスに亡命)。とくに当時のドイツ社会がファシズムの神話作用に無自覚的な服従をしたことに疑問を抱いた彼は，思想の自由とは結局のところ文学的行為，詩的行為に存すると考えるにいたったという。スタロバンスキーはこれ以後，ジュネーヴ大学のマルセル・レイモンに師事し，さらには医学の道を歩むこととなる。

つづいてコランジェロは考察の対象を，スタロバンスキーがおこなった詩作による芸術的経験の分析に拡げ，人間という感覚をもつ存在の逆説をあつかい (第 4 章「感覚的存在とその逆説」)，ついでモーリス・メルロ＝ポンティを引きつつ，人間の意識と身体との関係から文学・芸術作品全体のもつ意味を問い，『批評の関係』における分析・批評から作家自身の経験を考える（第 5 章「身体，関係。経験としての作品」)。また，第 9 章で解釈学的循環にたいするスタロバンスキーの見解（解釈する者とその対象との関係）を分析した後，18 世紀の理性の光と闇にかんする批評家の言説をとりあげている (第 11 章「理性の生命と冒険」，第 12 章「闇の回帰と拡大理性」)。

さて本書のなかでもとりわけ多くの頁が割かれているのが，スタロバンスキーの主著『透明と障害』にかんする論考である。第 13 章「ルソーを読む」においてコランジェロは，批評家特有の解釈について考察している。要約すると――スタロバンスキーは〈透明＝本質〉と〈障害＝現象〉という 2 つの言葉

を対立させ，これら二律背反するイメージの反復をルソーの著作のなかに読みとっているが，その読解の独自性は，ルソー作品に告発者の思想を見，これを近代批評における最初の思想的表明として位置づけた点にある。スタロバンスキーによればルソーの思想は，社会状態における人間の「実在（エートル）と仮象（パレートル）のあいだの不一致」を激しく非難することに発している。しかも，ルソーは仮象という人間の〈見かけ（アパランス）〉の部分を文明と社会の産物であるとし，人間の本質であるどころか人間の〈悪〉と定義したという。このようなルソー理解についてコランジェロは，〈悪〉の実態を暴き社会を告発しながら読者を共感させ道徳的効果をあたえるルソー特有のディスクールに，スタロバンスキーが書き手と読み手とのあいだで生じる劇的対話を見いだしていることを指摘する。それゆえ『エミール』，『社会契約論』および『新エロイーズ』はいずれも，ルソーが文明を否定する理由，ならびに文明がもたらす〈悪〉を治療する理由を示す模範の書となりうるという。

つぎにコランジェロが注目するのは，『透明と障害』におけるルソーの自伝的な語りにかんする考察である。スタロバンスキーによると，ルソーの自伝的な言説は社交から退き孤独のうちに暮らすことによって生まれた。自伝を書く行為によって，ルソーは仮面をかぶった世界を告発しながら，社会的に無となる自分の不在を存在するものと肯定し，自らの社会的沈黙を示そうとしたのだという。この点にかんしてコランジェロは，「〈見かけ〉とは〈悪〉である」という主張がルソーの全作品を決定づけていると同時に，彼の理論的思考をも支えている，というスタロバンスキーの解釈を強調する。そして批評家に『告白』や『対話』，『夢想』といった自伝的著作の探究が可能になったのは，彼がそこに内在する緊迫感を見いだしたからだと評している。

つづけてコランジェロは，「自己を描くと同時に身を隠す」という作家の行為のなかに，批評家が美をめぐる問題の新たな誕生を認めている点に着目する。スタロバンスキーによれば，かかる二重性によってルソーのことばは，まったく新しい概念，「言語が担う使命」を生む契機となったという。すなわち，ルソーにとって自己を語ることは人生の過ぎ去った現実を再現することではなく，むしろ文体に可能なかぎり今現在の意味を保持することにある。すべてを語るために，そして自らのことばの内部に「私」の存在を探求するために，ルソーはエクリチュールというひとつの実践に身をゆだねる。このようなスタロ

バンスキーの解釈についてコランジェロは，ルソーを読むことはエクリチュールが創りだす「私」のイメージを確認するにとどまらず，そのイメージがルソーの提示しようと試みたものと一致するか否かが問われることになると締めくくる。

ルソー解読をめぐる考察を終えるにあたってコランジェロは，批評家による〈透明〉と〈反省〉の分析をとりあげている。スタロバンスキーの解釈によれば，ルソーの文体に認められる直接的透明性とは〈反省〉のなされぬ状態で，自分自身の本質にしたがって描かれるさいに出現する。換言するならば，ルソー的エクリチュールにおいて暗黙のうちに〈反省〉が為されると透明性は損なわれてしまう。こういった批評家の考えを踏まえてコランジェロはルソーについての自説を展開する。すなわち，「自然人は〈反省する〉行為をしない」とルソーは主張し，〈反省〉を〈見かけ〉というまやかしの原因と見なしたにもかかわらず，彼自らは〈反省〉を続けることでしか〈反省〉の意図なきことを認識できなかった。つまり，生来の自然人の性質がルソーにはまったく欠けているのだという。

スタロバンスキーの解釈では，ルソーは〈見かけ〉を闇と否定し，周囲からの迫害に強迫観念を抱きながらも，「行動を阻まれる者は有罪ではありえない」という無罪主張のために逆説的にも迫害を利用した。だが，そうした戦略の背景にコランジェロは，ルソーが人間の生活条件には曖昧な部分があることを理解しておらず，彼が偶然性を拒否したことをつけ加えている。ここでいう偶然性とは，人間の生活上におこる物質的・社会的な強制を意味し，他者にたいする基本的な責任へと我々を引き入れる法則である。こうしてコランジェロは，近代に現れた告発者の思想を検証してスタロバンスキーがたどりついたのは，「限りある生命をもつ者の倫理学」としての，〈見かけ〉の倫理学の可能性にかかわる問いなのだ，と結論づける。

最終章「神話と批判的受容」においてコランジェロは，スタロバンスキーにおける〈批評〉行為の意味を論じているが，その理解のために不可欠なのは判断能力をめぐる批評家のつぎのような考えだとする――「判断とは，ひとつの抽象的で純粋な能力としても，ひとつの平然たるまなざしとしても，また映しだす光景と示しあわせることのない知的かつ透明で，無表情な一枚の鏡としても考えられるべきではない。それどころかあらゆる感覚能力は，その光景と連

携しているのだ」。視覚の発達時期は「第 2 の誕生」期であり，これを境にして単に見る機能しかなかった眼は真に対象をとらえる「魂の器官」となるとしたのは『エミール』のルソーであったが，こういった視覚のもつ役割，見ることと学ぶことの密接な関連性は，スタロバンスキーにとってもきわめて重要な位置を占めているといえよう。本書の考察には哲学的な観点が勝ちすぎる感は否めず，スタロバンスキー的批評の一翼をになう医学的・心理学的アプローチなどについては，その考察の対象となっていない。しかしながらスタロバンスキー批評の真価を問う先駆的な試みであることにかわりなく，実証的かつ綿密な考証にもとづき，テクストのもつ倫理的な意味を究明しようと努めた点では，本書に学ぶべきところはけっして少なくあるまい。

註

1）Yves Bonnefoy, *Goya, Baudelaire et la poésie.* Entretien avec Jean Starobinski, suivi d'études de John E. Jackson et de Pascal Griener, Genève : La Dogana, 2004, 111 pp.

2）*Critique*, n° 687–688, août–septembre 2004.

3）Serge Bimpage, «Séduction de l'intelligence, intelligence de la séduction», *La Tribune de Genève*, 17 novembre 2000, p. 24. 同記事を執筆したセルジュ・バンパージュ氏はスタロバンスキーとは旧知の間柄であり，記事はふたりのディスカッションの結実であることを同氏からの私信で確認している。したがって記事で引用された批評家のことばは，すべて同氏が直接スタロバンスキーから聞いたものであることを付言しておく。

4）Carmelo Colangelo, *Jean Starobinski. L'apprentissage du regard*, Genève : Éd. Zoé, 2004, 187 pp.

5）Carmelo Colangelo, «La guerre et les images : autour des premiers textes de Jean Starobinski», in *Starobinski en mouvement*. Sous la direction de Murielle Gagnebin et Christine Savinel, Paris : Éd. Champ Vallon, 2001, pp. 346–356.